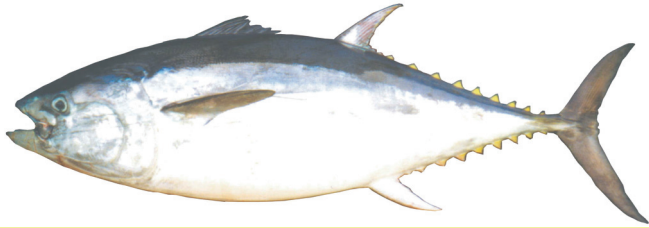


ミナミマグロ

Southern Bluefin Tuna, *Thunnus maccoyii*



漁獲しており、近年は蓄養用種苗が中心である。それ以外は全てはえ縄漁業で、公海域では日本、台湾、韓国船が、沿岸域でニュージーランド、オーストラリア、インドネシアが操業している。インドネシアの操業海域は産卵場に相当する。

管理・関係機関

- みなみまぐろ保存委員会 (CCSBT)
- 大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)
- インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

最近一年間の動き

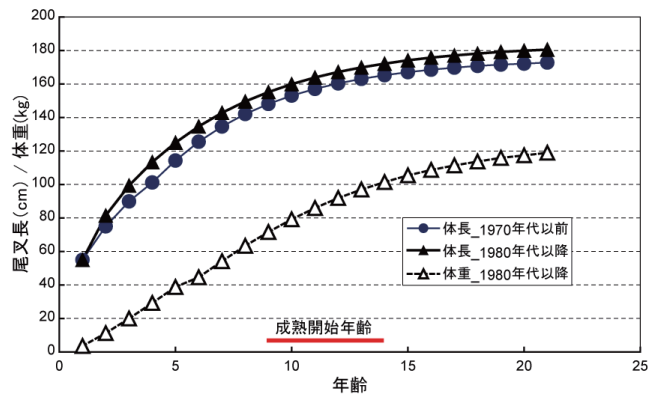
みなみまぐろ保存委員会 (CCSBT) の昨年の年次会合 (2006 年 10 月) では TAC が大きく減少したが、資源状況に顕著な変化は見られないとした科学委員会 (2007 年 9 月) の報告を受けて、2007 年 10 月の年次会合では前年と同じ TAC に合意した。

生物学的特性

- 寿命: 20 歳以上、耳石での最高齢は 45 歳
- 成熟開始年齢: 8 歳
- 産卵期・産卵場: 9~3 月、インド洋東部低緯度域
- 索餌場: 西風皮流域 (南緯 40~50 度の海域)
- 食性: 魚類・頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

漁業資源の動向

表層漁業、はえ縄漁業とも 1950 年代初期に漁獲が始まった。表層漁業による漁獲は 1982 年に 21,500 トンに達し、その後は自主規制により激減したが、近年蓄養用種苗に漁獲を再開し年間約 5,000 トンを漁獲している。はえ縄漁業の漁獲量は 1961 年に最高の 77,900 トンに達したが、産卵場と小型魚の多獲される海域での操業自粛、TAC 規制等で徐々に減少し、1989 年以降は 8,000~14,000 トンの間でほぼ安定している。



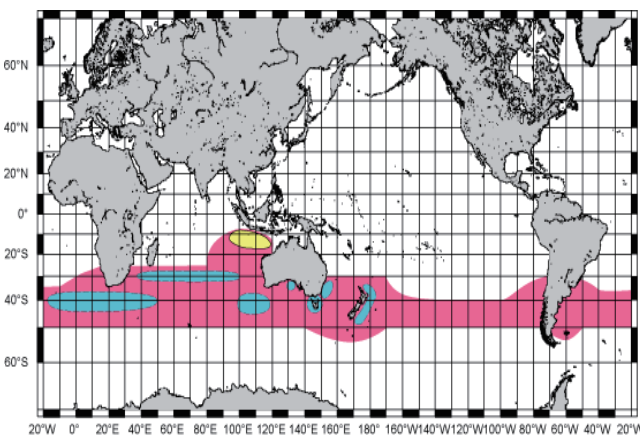
CCSBT で用いているミナミマグロの成長曲線

利用・用途

刺身

資源状態

親魚資源量は初期資源量よりはるかに少なく、CCSBT の管理目標の 1980 年水準や、MSY を与える水準よりもかなり低い。この 10 年間の加入量は 1950~1980 年水準よりもかなり低く、加えて 2000 年級、2001 年級の加入はかなり低く、1999 年級も低い可能性がある。現状の漁獲水準は、特に近年の低加入によって、資源をさらに減少させる可能性が高い。



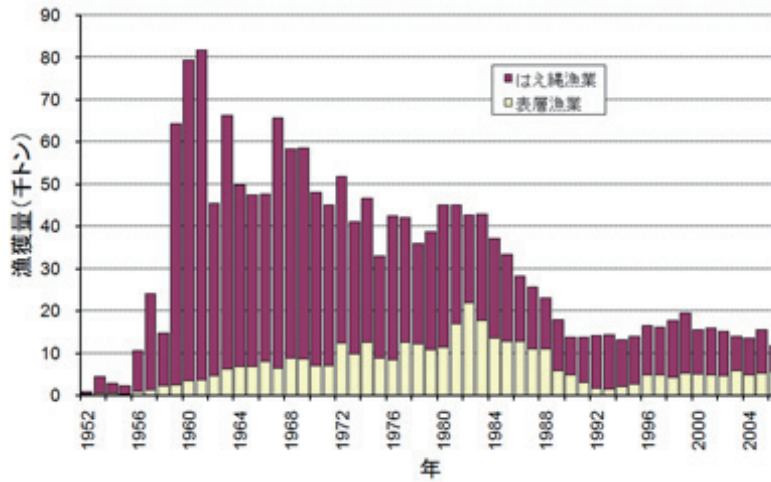
ミナミマグロの分布(赤)、漁場(青)、産卵場(黄)

漁業の特徴

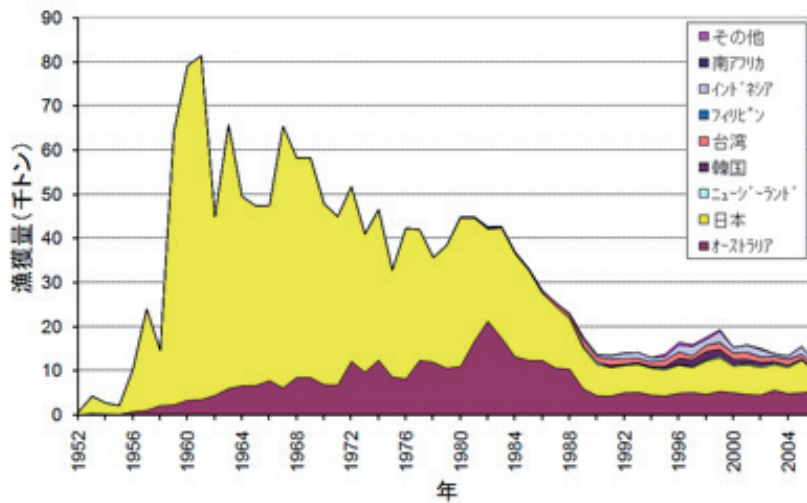
まき網を中心とした表層漁業と、はえ縄漁業とで漁獲される。表層漁業はオーストラリア沿岸で 3 歳までの小型魚を

管理方策

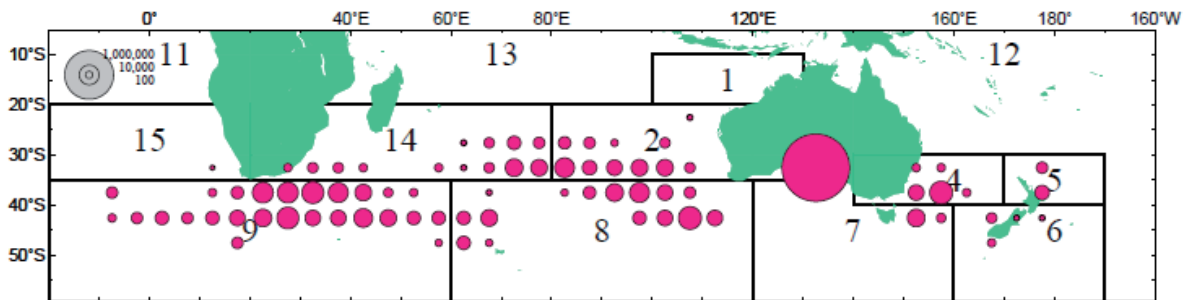
2007 年漁期の TAC は合計 11,810 トンで合意。加盟国分は日本 3,000 トン、オーストラリア 5,265 トン、ニュージーランド 420 トン、韓国 1,140 トン、台湾 1,140 トン。協力的非加盟国分はフィリピン 45 トン、南アフリカ 40 トン、EU10 トン、オブザーバー国分はインドネシア 750 トン。韓国、台湾は自主的に 1,000 トンを上限とし、合計漁獲量は 11,530 トン以下となる。資源に例外的な状況が生じない限り日本は 5 年間、他国は 3 年間、この TAC を維持する。



ミナミマグロの漁獲量の推移(Data: Report of the eleventh meeting of the Scientific Committee、CCSBT)



ミナミマグロの国別漁獲量の推移(Data: Report of the eleventh meeting of the Scientific Committee、CCSBT)



ミナミマグロの緯経度5度区画別の漁獲尾数 (2005年暫定値。20尾以上の区画のみを示す。
1-15はCCSBT統計海区。主に1海区での、インドネシアによる漁獲を含んでいない点に留意。)

資源評価まとめ

- 親魚資源水準は極めて低い
- 2000、2001、2002年の加入が極めて悪く、1999年も悪い可能性が高い
- 新たなTACに基づいた漁獲量では長期的な資源回復が見込まれる。

資源管理方策まとめ

- 新たなTAC合意

ミナミマグロの資源の現況 (要約表)

資源水準	低位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近5年間)	12,000~16,000 トン 平均: 14,100 トン
我が国の漁獲量 (最近5年間)	4,207~7,855 トン 平均 6,001 トン